

# 青年期における非行傾向とコミュニケーション

## 行動の特異性およびその発達の規定因を探る

—特にリスク回避としての対人的距離化方略に焦点をあてて—

研究代表者

東京大学大学院 教育学研究科

遠藤利彦

共同研究者

大阪大学大学院人間科学研究科

野村 晴夫

共愛学園前橋国際大学国際社会学部

松本 学

藤女子大学文学部

石井佑可子

### まえがき

非行発生に関連する要因についての研究は多岐分野にわたっており、家庭や教育環境、民族、地域差などの環境要因（複合モデルとして Chung & Steinberg, 2006 など）や、反社会的かつ偏った自己概念（宮野、1981）、自己制御の低さ（Gottfredson & Hirschi, 1990）、共感性と罪悪感（Kruh, Frick, & Clements, 2005）や恥（永房、2004）などある種の情動の欠如といった個人内要因が報告されているが、非行の特に大きな要因としては、対人関係面での難しさが多く指摘されている。

非行少年らにおける対人関係スタイルの大きな特徴には特異に緊密な友人関係(Agnew, 1991 ; Patterson, 1993 など)や、“逸脱した友人”の存在が挙げられており（小保方・無藤、2005 など）、非行的な仲間が身近に存在する状況で過度の同調をした結果自らも非行に関わってしまい、そうした仲間との接触を通じて非行がさらに学習、強化、

促進される過程が説明されている（Sutherland & Cressey, 1960 ; Akers, Krohn, Lanza-Kaduce & Radosevich, 1979 など）。また、実際の対人関係行動側面においても、非行少年のソーシャルスキル（Freedman, Rothentall, Donahoe, Schlundt & McFall, 1978 ; Gaffney & McFall, 1981）やスキルに対する知識（Veneziano & Veneziano, 1988）は、一般少年よりも低いことも示されていて、こうしたコミュニケーションの難しさを理由に、非行少年に対する教育矯正プログラムには多くの場合ソーシャルスキルトレーニング（SST）が採用されており（Taylor, Eddy, & Biglan, 1999 のレビュー参照）日本でも、1993年に一部改正された矯正局長依命通達をきっかけとして、少年院でのSSTが導入されている（品田、2008・角谷、2008などに実施例）。一方で相川（1995）は、日本での非行少年に対するSST実施の課題として、対象非行少年のみならず対照群のソーシャルスキル特徴も把握する必要性があることを主張しているが、日本における実

証研究は管見する限り数多くない。

そのような研究状況の中、石井・新堂(2011)は、社会的スキルに関わる指標を軽度非行少年群と一般対照群とで比較した。従来研究の中では、自己主張や親和といった行動の、円滑な対人関係における有効性が指摘されてきたが、この研究では、非臨床的対照群と比較して、非行少年がむしろ、その一般的に好ましいとされてきた主張や親和をより多くみせる一方で、よく知らない相手と適切な距離を置いて接することや、好ましくない他者からの誘惑行動等に対して、それを適当にはぐらかすなどの回避的な行動(石井らは、「対人的距離化スキル」と命名している)をとることが少ないという事実が明らかとなった。また、対人状況におけるメタ認知の低さも見いだされた。先述の通り、少年非行の一般的な特徴として、集団での犯行が多く、「逸脱した他者への同調」が少年らを(本来単独ならば必ずしも生じえないであろう)非行へと結果的に駆り立ててしまうことが指摘されているが、石井らの結果からは、非行少年らが「親しくない逸脱した他者」に、半ば巻き込まれる形で非行に手を染めてしまう可能性が示唆されたといえる。つまり、彼らのより本質的な対人関係上の問題として、逸脱した他者との適切な距離化やはぐらかしといったリスク回避的な行動、およびそれにかかわる対人的情報処理の特異性にこそ焦点をあてるべきことが推察されたのである。

そこで本研究ではまず、非行少年らにおける対人的距離化スキルの低さについて、対人的距離化方略をとりえないことが何によって、どのように非行傾向へつながらのかを彼らの特異な対人的情報処理バイアスも含めて詳細に検討することとしたい。

## 目的

本研究が企図するところは、非行少年の問題の

本質を特にリスク回避的な対人的距離化の乏しさおよび特異な対人的情報処理バイアスに潜在していると仮定した上で、その実際を把握し、かつ種々の非行の発生にかかわる諸要因を明らかにすることであった。具体的には、まず非行少年および非行傾向の高い青少年が、それまでにどのような成育過程を辿り、また主に養育者等との間でいかなるアタッチメント関係を経験してきたのかを反映すると考えられるアタッチメントスタイルや、現時点において、どのような対人関係上の行動特徴を有するに至っているのかについて検討を行った(調査1)。次に、非行少年および非行傾向の高い青少年が、他者の表情など、対人関係にかかわる種々の社会的刺激に対して、どのような知覚・認知上のバイアスを有しているのかについて検討を行った(調査2)。

## 調査1：対人関係行動との関連

### 問題と目的

調査1では、非行傾向と、対人関係スタイルに関わる変数(社会的スキル、アタッチメントスタイル、同調傾向)との関連について検討を行うため、一般中高生を対象に質問紙調査を実施した<sup>1</sup>。

各変数について、まず社会的スキルについては、本研究の主目的に沿って、従来の社会的スキル研究で焦点を当てられていた主張や親和を中心としたポジティブな表出スタイルのスキル(対人的接近スキルと呼ぶ)のみならず、回避や欺瞞を駆使してその場の関係を終息させる対人的距離化スキルも併せて検討した。次に成育過程の履歴を示す指標として、アタッチメントスタイルの測定を行

<sup>1</sup>当初は実際に補導された非行少年も対象に含めて計画していたが、依頼していた現場からの許可が事情により得られなかったことから、また軽度非行に焦点を当てていることから、一般中高生の中での非行傾向を問題にするべく計画を一部変更した調査の概要で述べた通り、調査項目に非行事実に関する内容を詳細に含めたため、結果として補導

う。アタッチメントスタイルは発達初期から永続的に不変という訳ではないことが示されているが、ある程度の一貫性を維持すると考えられることから、幼少期に培った対人的枠組みをいくらか反映すると考えられる。これまでにアタッチメントスタイルの不安定さが非行と関連することは既に指摘されているが( Allen, Marsh, McFarland, McElhaney, Land, Jodl, & Peck, 2002)、アタッチメントの不安定性がどのような行動へ結びついて非行へつながるのかについてはあまり明らかにされていない。ここで、社会的スキルとの関わりからアタッチメントスタイルが非行傾向へ及ぼす影響を検討することは意義があると考えられる。最後に同調傾向については、非行少年における「逸脱した他者への同調」が指摘されていることから、非行傾向へ影響を与えると考えられる。実際、より非行性の強い個人ほど、同調傾向が高いことが示されている(小保方・無藤、2006)が、特に同調傾向が強く、距離化スキルを行使できない個人において、非行行動は高くなると予測される。なお、非行傾向の指標については、実際の非行行動報告に加えて、非行許容や非行友人数も問い、非行に対する本人の態度や、「逸脱した友人」が実際にどの程度に存在するのかについて検討した。

## 方法

### 調査対象者

中学生：公立中学 A、B の 1、2 年生（男子 171 名、女子 175 名）。

高校生：対象は公立高校 C の 1、3 年（男子 120 名、女子 171 名）。

### 質問紙の構成

中学生：(a) メタ認知尺度；石井(2007)による。自らのコミュニケーションやその状況についてどれだけ理解しているかという項目、10 項目。(b) 対人的接近 - 距離化スキル尺度；石井(2007)による。ポジティブなスタイルのスキル（対人的接近

スキル）だけではなく、相手との距離を取るスキル（対人的距離化スキル）も含めた尺度。接近スキル 6 項目、距離化スキル 8 項目。この尺度はスキル行使を相手との親密性ごとに測定する形式で、各項目に対して、「親しい人（家族や友人）が相手だった場合」「友人を除く活動の仲間が相手だった場合」「親しく無い人が相手だった場合」の 3 通り回答を求めた。(c) 一般他者に対するアダルトアタッチメント尺度 ECR-G0；中尾・加藤(2004)による。見捨てられ不安と親密性の回避の下位尺度からなるが、30 項目のうち 16 項目を用いた。(d) 同調性尺度；石本ら(2009)作成の 9 項目。(e) 非行傾向尺度（許容・行動・友人）；小保方・無藤(2005)の 6 項目。小保方らは各項目に対して「したことがあるか（実際行動）」と「この行為をしている友人が周りにいるか（友人）」の二通りを二件法で問うているが、本研究では非行への信念も含めて「この行為をしても良いと思うか（許容）」という質問を加えた。各項目 4 件法。

高校生：中学生と概ね同様だが、ECR-G0 は 30 項目全てを使用し、中学生に対する調査項目とは別に、アダルトアタッチメント測定として (f) 強制選択法 (Hazan & Shaver, 1987 を訳出) の質問項目と、また非行傾向として (g) 非行自己報告尺度 (岡邊、2010) へも回答を求めた。

中高生共に、質問紙の教示は教諭及び研究担当者が全体へ口頭で行い、理解しづらい生徒へは個別に説明を行った。回答した質問紙は封筒に生徒自身が入れて厳封し回答内容が漏れないよう配慮した。

## 結果

### 距離化スキルの得点

まず各変数について群別で比較したところ、距離化スキルの親密性条件別行使傾向について違いが見られた。先述の通りスキル尺度は親密性条件別に回答を求める形式だが、成人では接近スキル

は相手が親密であるほど行使頻度が高くなり、距離化スキルはその逆の傾向が見られることが明らかになっている（石井、2007）。接近スキルは中高生共に成人と同じ傾向が示されたが、距離化スキルに関しては、高校生は成人と同様の傾向だったものの（図1）、中学生ではその傾向は認められず、女子で親密性高>中のみ有意差が見られ、男子で親密性条件間での有意差が認められなかった（図2）。また全般的距離化スキル得点（合算値）自体に中学生と高校生、高校生と成人とで有意な差が見られることも明らかになった（図3）。先述の通り、一般高校生は非行少年に比して距離化スキルを高く、また成人と同様のスタイルで行使していることが示されており（石井・新堂、2011）、このスキルは非行から身を守るリスク回避の手段と考えられていたが、青年期前期ではまだスキルとして確立しておらず、対人関係で回避や欺瞞を自在に操ることは困難なのかもしれない。今後発達段階につれて起きる変遷について、非行との関係と併せて検討することが要される。

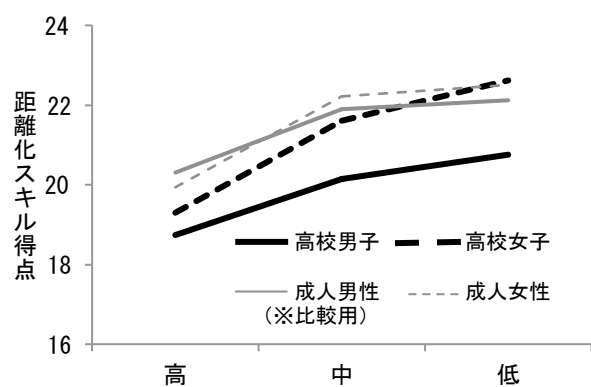


図1. 高校生男女の親密性別距離化スキル行使傾向<sup>2</sup>

<sup>2</sup> 灰色の線は石井（2007）で得られた成人の行使スタイルを比較用に示した

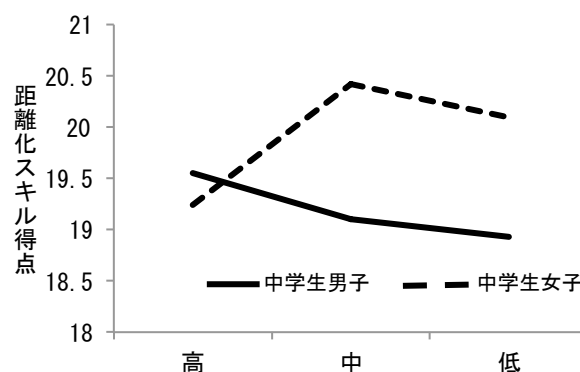


図2. 中学生男女の親密性別距離化スキル行使傾向

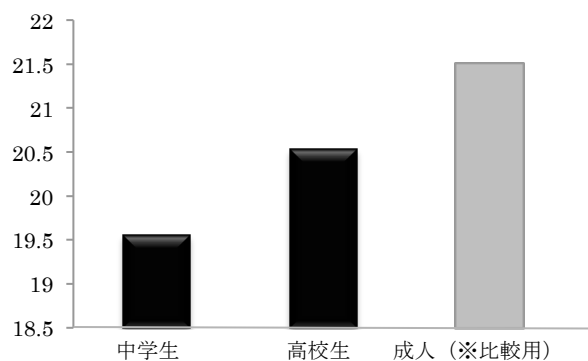


図3. 対人的距離化スキル（合算値）各得点<sup>3</sup>

### 群毎の階層的回帰分析結果

次に、中高、性別で分けられる4群毎に、非行傾向（行動）を従属変数とする階層的回帰分析を行い、全般傾向を検討した（なお、全般的な傾向を検討するため、この分析ではスキル行使得点を全ての関係性別得点を足した合算値で分析した）。その結果、**中学生男子**では、非行許容は非行傾向に直接の影響を及ぼし、非行友人と相関があった。また接近スキルは非行許容に対して正の、距離化スキルは負の影響を及ぼしていた。さらに接近スキルはアタッチメント回避から負の影響を、距離化スキルは同調傾向から正の影響を受けていた

<sup>3</sup> 灰色のバーは石井（2007）で得られた成人の行使スタイルを比較用に示した

(図4)。中学生女子では、非行傾向へは非行許容と非行友人の数が共に影響し、非行友人の数へは接近スキルが正の影響を与えていた。またアタッチメント回避は接近スキルへは負の、距離化スキルへは正の影響を持つことが示された。さらに距離化スキルへは同調傾向が正の、アタッチメント不安が負の影響を与えていた(図5)。

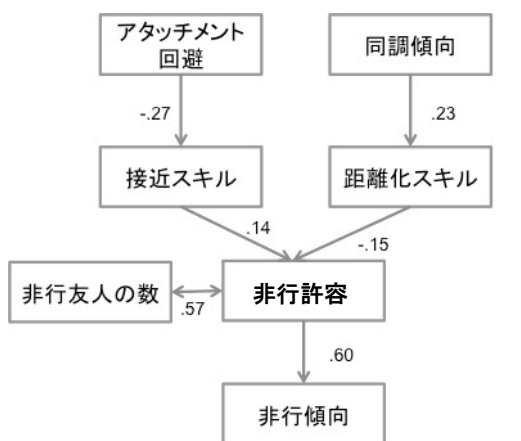


図4. 中学生男子における階層的回帰分析結果

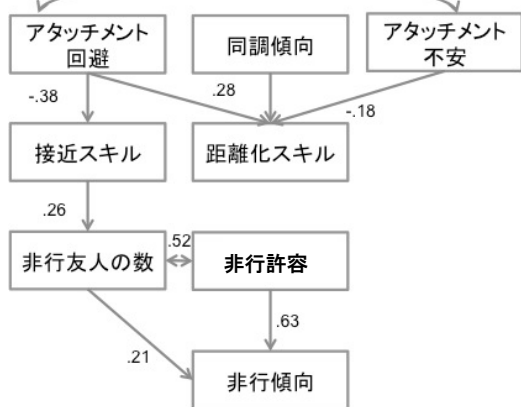


図5. 中学生女子における階層的回帰分析結果

高校生男子では、非行傾向へは、非行許容と非行友人の数が共に影響し、非行許容と非行友人も関連していた。またアタッチメントの回避が非行友人と接近スキルへ負の影響を及ぼしていた(図6)。高校生女子に関しては、非行傾向へは非行許容が直接正の影響を及ぼし、非行許容と非行友人

との間には正の相関があった。また非行友人の数に、メタ認知が正の影響を示し、メタ認知へは、アタッチメント不安傾向が正の影響を持つことが分かった(図7)。<sup>4</sup>

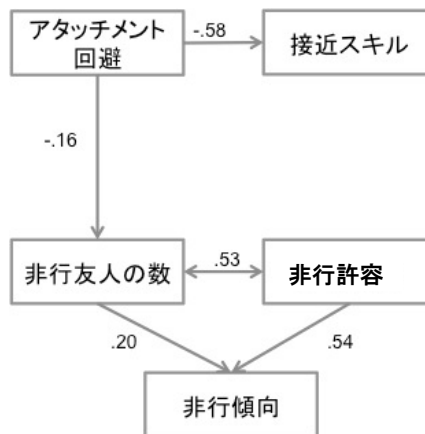


図6. 高校生男子における階層的回帰分析結果

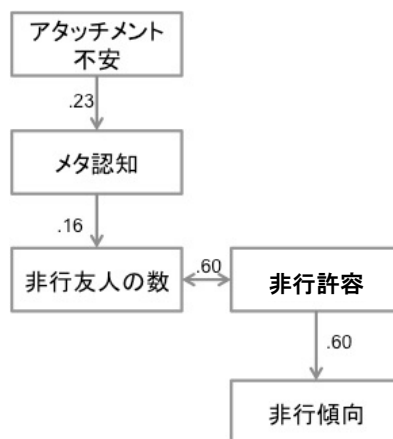


図7. 高校生女子における階層的回帰分析結果

全般的な傾向として、非行許容の高さが非行傾向に影響を及ぼす有意な道筋が見られ、また非行許容は非行友人の数と有意な相関関係にあった。これは諸先行研究の結果と一致しており、非行友人との接触を通して非行許容が形成され、また非行許容が高いことで非行友人が多くなる循環関係

<sup>4</sup> 各統計値は図に示した通り。また、統計値は全て有意なもののみ言及している。

が示唆されている。

非行傾向に対するスキルの直接の影響に関しては全群で有意なパスが見られなかったが、中学生において非行許容（男子）、非行友人（女子）に対して接近スキルが正の影響を及ぼすことが示され、間接的にはあるが接近スキルが非行に関連することが示された。特に女子における接近スキルから非行友人を経由した非行傾向への間接効果は、接近スキルが逸脱友人との高い接触を通して非行へ繋がる道筋を示唆するものと考えられる。しかし一方で、接近スキルは回避傾向から負の影響を受けており、このスキルの低い者は単に友人自体が少ない可能性もぬぐえない。慎重に検討する必要があるだろう。

距離化スキルは非行許容に負の影響を及ぼしていた（男子のみ）。距離化スキルが非行抑止効果を持つことが期待出来るかもしれないただし、前述の通り中学生男子の距離化スキルは未発達の可能性があるため、結論を急ぐことは出来ない。これに関しても慎重に検討する必要がある。またこのスキルは、同調傾向から正の影響を受けていた。従来同調は非行要因の一つとされてきたが、今回の対象が一般中高生だったため、同調が多数派である「非-非行群」に対して起きたと考えられる。彼らが置かれている環境、友人の状態を把握して検討する必要性が示されたといえよう。

各スキルと非行に関わる変数との関係が一部示されたが、これらの関係は高校生群では見られなかった。青年期初め（中学生）は対人関係が大きく変わる時期のため、社会的スキル行使は非行参入を初めとする関係開始に重要な働きを担っている可能性が考えられる。一方高校生は、すでに社会性ステータスが確立されている時期かもしれない、そのために非行に関わる変数が対人関係を新たに結び結ぶ（もしくは回避する）スキルの影響を受けなかったのかもしれない。今後は、既に関係が

開始した中での対人関係行動と非行との関連を捉える試みも必要だろう。

### 距離化スキルと非行傾向との関連

先述の通り、先行研究によって距離化スキルと非行傾向との間に関連があることが示唆されている。従って、実際の行動傾向を示す距離化スキルが、その他の要因（逸脱友人条件、アタッチメントスタイル、同調傾向）とどのように関連して非行傾向へと結びつくのかについては、より詳細に検討する必要がある。今回は各要因と距離化スキルとの交互作用モデルを想定してそれぞれ分析した。

#### (1) 逸脱友人条件からの検討

学校段階（中高）と性別毎に非行の実際行動を従属変数とした二要因（距離化スキル高低×逸脱友人高低）分散分析を、距離化スキル尺度が設定していた3つの親密性条件（高中低）別に行った（逸脱友人については同一の変数を用いた）ところ、全ての群において逸脱友人の主効果が有意であった（中学男子： $F(1, 146)=27.85, p<.001$ 、中学女子： $F(1, 161)=38.74, p<.001$ 、高校男子： $F(1, 116)=20.04, p<.00$ 、高校女子： $F(1, 167)=16.84, p<.001$ 、いずれも高>低）。

その他の結果について、**中学生男子**では距離化スキルの主効果は親密性高条件（ $F(1, 146)=4.63, p<.05$ ）と中条件（ $F(1, 144)=8.45, p<.01$ ）においてのみ有意であった（いずれも高<低）。また距離化スキル×逸脱友人の交互作用は親密性高条件で有意傾向（ $F(1, 146)=4.63, p<.1$ ）、中条件で有意（ $F(1, 144)=4.88, p<.05$ ）であった。単純主効果の検定の結果、高条件（ $F(1, 45)=4.14, p<.05$ ）、中条件（ $F(1, 45)=6.77, p<.05$ ）共に、逸脱友人高群においてのみ距離化スキルの主効果が認められた（いずれも高<低）（図8,9）。

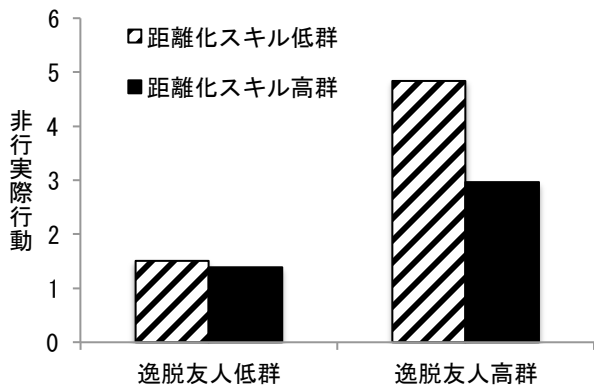


図 8. 中学生男子の非行傾向における距離化スキルと逸脱友人の影響（親密性高条件）

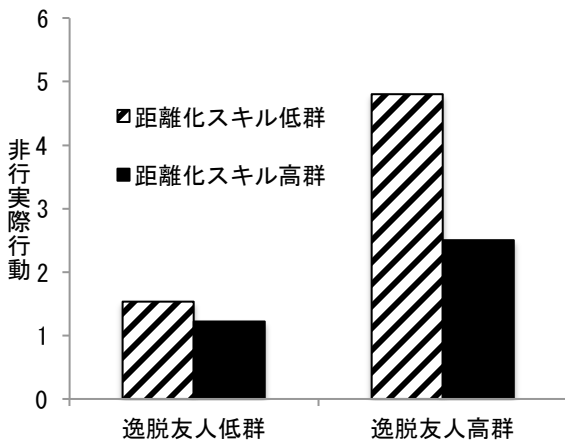


図 9. 中学生男子の非行傾向における距離化スキルと逸脱友人の影響（親密性中条件）

中学生女子では、親密性高条件における距離化スキル×逸脱友人の交互作用が有意だった ( $F(1, 161)=4.28, p < .05$ ) が、単純主効果の検定の結果、逸脱友人高・低群共に距離化スキルの主効果は認められなかった。また、中、低条件では距離化スキルの主効果及び交互作用効果は認められなかった。

高校男子においては中条件における距離化スキル×逸脱友人の交互作用が有意傾向だった ( $F(1, 116)=3.27, p < .1$ )。単純主効果の検定の結果、逸脱友人高群において距離化スキルの主効果が有意傾向で認められた ( $F(1, 63)=3.11, p < .1$ 、高<低)。低条件では距離化スキルの主効果及び交互作用

用効果は認められなかった(図 10)。

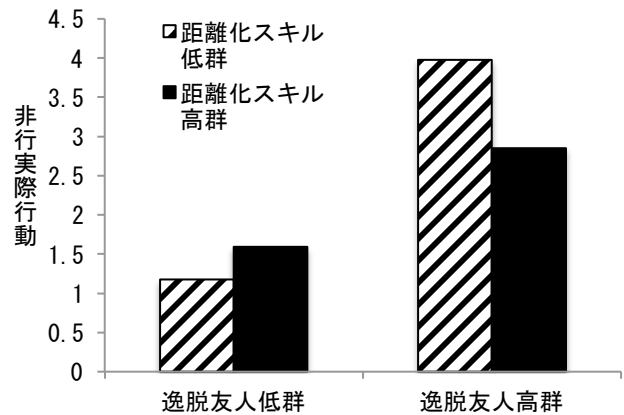


図 10. 高校生男子の非行傾向における距離化スキルと逸脱友人の影響（親密性中条件）

高校女子では低条件における距離化スキルの主効果 ( $F(1, 167)=5.17, p < .05$ 、高<低) と、距離化スキル×逸脱友人の交互作用 ( $F(1, 167)=9.87, p < .01$ ) が認められ、逸脱友人高群における距離化スキルの主効果が有意に認められた ( $F(1, 47)=6.20, p < .05$ 、高<低) (図 11)。

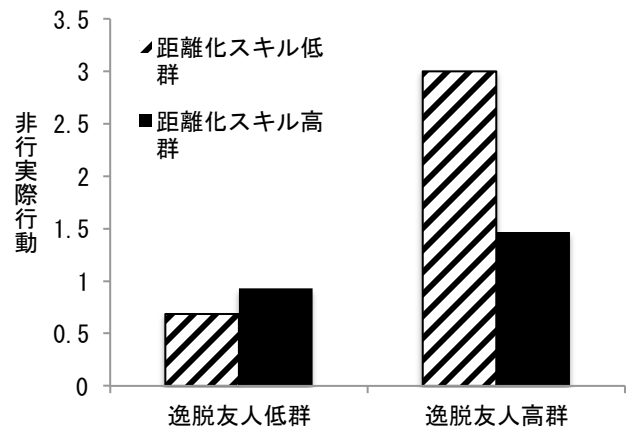


図 11. 高校生女子の非行傾向における距離化スキルと逸脱友人の影響（親密性低条件）

### 考察

全群で逸脱した友人の影響が認められた。先行

研究との諸結果と一致して、逸脱した友人がいた場合に非行へより参加しやすくなることが示された。この傾向は青年期前・中期を通して変わらないといえる。また、逸脱した友人数と距離化スキルとの交互作用が認められた部分に関しては、逸脱した友人が多い場合に距離化スキルを高く行使出来る個人は非行傾向が低いことが示唆された。逸脱友人が存在した場合にリスク回避として距離化スキルが有効なことが示されたといえよう。しかし、この効果は全ての条件で認められたわけではなく、青年期前期である中学生では男子のみが親しい人へ対する距離化行動、中期にあたる高校生では男女とも親密性が比較的低い相手に対する距離化行動が非行傾向へ抑制的に働いていた。これは発達段階によって友人の意味及びそれに付随する非行への巻き込まれの質が異なることを示唆するものかもしれない。

非行少年を対象とした総務庁青年対策本部の調査では非行少年群は一般少年に比して異年齢・異性・親に合わせたくない友人がいるとの答えが多いこと、親しい友人を得たきっかけは“街で知り合った友達”への回答が特に多かったことが指摘されており、これらの傾向は高校生相当の年代になるとより強くなると報告されているが(野田, 1999)、この傾向と今回の結果を併せて鑑みると、青年期前期では良く知っている親しい逸脱友人本人によって直接非行へ誘われる可能性が多いのかもしれない一方で中期には対人関係がより複雑化し逸脱友人の多さが(逸脱した)「親しくない他者」との接触機会の多さに繋がる可能性も考えられる。今後この年代の対人関係の現状や、彼らにとっての「友人」の意味についても併せて検討していく必要があるだろう。

## (2) アタッチメントスタイルからの検討

学校段階と性別毎に非行の実際行動を従属変数とし、2要因(距離化スキル(低・高)×不安(低・

高)／回避(低・高))の分散分析をそれぞれスキルの関係性条件別に行った。その結果、アタッチメントスタイル因子とスキルの交互作用が認められたのは、高校女子群における関係性中、低条件での距離化スキル×回避のみだった(中条件では( $F(1,167)=6.59$ 、低条件では( $F(1,1167)=6.32$ 、共に $p<.05$ )。)

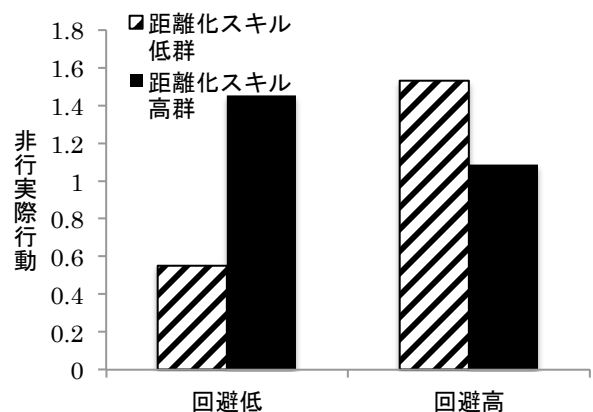


図 12. 高校生女子の非行傾向における距離化スキルと回避傾向の影響(親密性中条件)

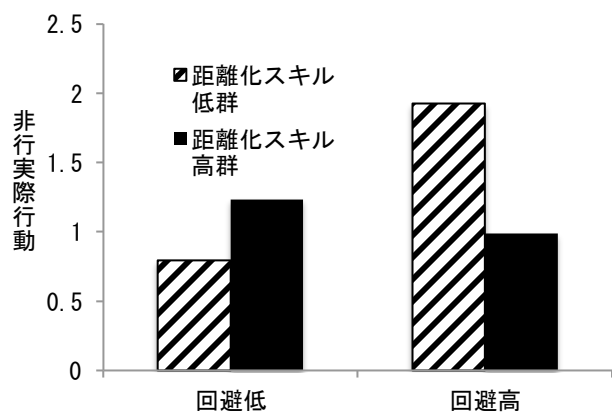


図 13. 高校生女子の非行傾向における距離化スキルと回避傾向の影響(親密性低条件)

単純主効果の検定を行ったところ、まず関係性中条件では、回避低群における距離化スキルの主効果が認められた( $F(1,69)=7.65$ ,  $p<.01$ 、高>低)が、高群においては主効果が認められな



った(図 12, 13)。

### 考察

回避傾向が高い個人はネガティブな他者観を持つとされている(中尾・加藤、2004 など)ことから、回避傾向が低く、他者に対して特にネガティブな信念を持たない個人にとっては、親密性が中程度(親しくないものの関わりがある)の相手に対して対人的距離化を多く行くと、ソーシャルサポートが得られにくくなる等の対人関係上のネガティブな帰結をもたらし、ひいては非行傾向へと繋がるのかもしれない。次に関係性低条件では回避高群における距離化スキルの主効果が認められた( $F(1,98)=5.50, p<.05$ 、高<低)が、低群における距離化スキルの主効果は認められなかった。

距離化スキルは他者との関係を円滑に終息する行動を指すため、もともとネガティブな対人観を有する回避傾向の高い個人が、彼らにとって親しみのない、あまり良く知らない他者に対して巧く距離を図れないでいると非行傾向に繋がること示されている。ただし、この結果からは巧く距離を取れない為に他者に巻き込まれ、非行へ従事してしまうのか(恐れ回避型による従犯非行が想定される)、関係を終息できない際に距離を無理矢理取ろうとして、他者を不適切な形ではねのけてしまう為に非行行為へと繋がるのか(拒絶回避型による単独非行)は不明である。

また、今回はアタッチメントスタイル因子を独立に扱い、非行傾向や対人関係行動との関連を検討していた。今後は2因子の組み合わせによるアタッチメントスタイルの類型に基づいたより詳細な検討が必要である。またこれらの傾向は高校女子群においてのみ見られたが、人間関係に関わるリスク要因は女子非行群で特に高いことが報告されている(Hart, O'Toole, Price-Sharp, & Shaffer, 2007) ことと関連すると考えられる。女

子においては、他者との距離をうまく調整することが問題行動に、より大きな影響を与えうると考えられ、その影響力は養育者との関係から始まって長期的に培われた元々の対人関係に関する信念にも左右されるのだろう。解釈は難しいものの、この結果からアタッチメントスタイルによって対人関係行動と非行傾向との結びつきに差異が生じることが部分的に示唆された。今後は前述したアタッチメントスタイル類型や、リスク状況の影響等を加味したより精緻な分析が求められる。

### (3) 同調傾向からの検討

学校段階と性別毎に非行の実際行動を従属変数とし、2 要因(距離化スキル(低・高)×同調傾向(低・高))の分散分析をそれぞれスキルの関係性条件別に行った。その結果、距離化スキルと同調傾向との交互作用は、高校生男子における高条件( $F(1,116)=3.28, p<.1$ )と、高校生女子における高条件( $F(1,167)=2.91, p<.1$ )が有意傾向であったのみであった。それぞれ単純主効果の検定を行ったところ、高校生男子の同調傾向低群における距離化スキルの主効果が認められた( $F(1,70)=5.58, p<.05$ 、高<低)(図 14)。高校生女子においては、距離化スキルの主効果は同調傾向高低群共に見られなかった。

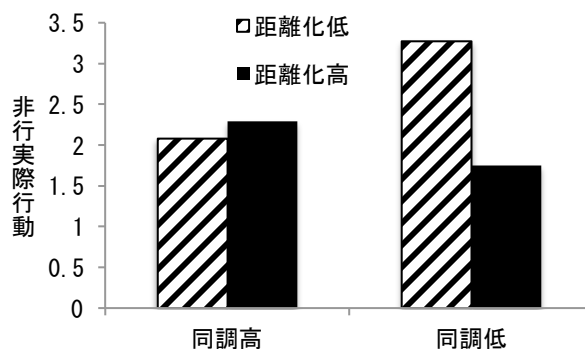


図 14. 高校生男子の非行傾向における距離化スキルと同調傾向の影響(親密性高条件)

また、非行少年における「逸脱した他者への同

調」を想定し、逸脱友人数高低×同調傾向高低の2要因分散分析も試みたが、有意な交互作用は全群に亘って認められなかった。

### 考察

全般的な分析と同様、同調傾向は今回の協力者達の非行行動を予測することは無かった。また、高校生男子群における距離化スキルとの交互作用効果も、同調傾向が低い個人が親密性の高い相手に距離化スキルを行使する頻度が低いと非行の実際行動得点が高いという、先行研究でしばしば指摘されている「逸脱した他者への同調」と一致するとは言い切れない結果を示していた。また、非行友人数と同調傾向との交互作用も認められなかった。その理由として、同調の測定方法によるものが考えられる。今回使用した同調の測定尺度は心的傾向を問う項目であったが、先行研究では同調性を実際の行動面（「教室を移動する時は一緒にいく」など）から捉えており、これは非行傾向と関連することが確かめられている（小保方・無藤、2006）。非行に影響を与える「逸脱した他者への同調」は、少年らの心的特性だけでは表すことが出来なかったと言える。他者への心的な同調傾向が「逸脱した他者への同調」を単純に説明するわけではないとすれば、今後、同調行動を直接測ると共に、その動機について検討する必要があるかもしれない。

### 調査1：総合考察

調査1では、非行参入に関わる対人関係要因として距離化スキルを中心とし、アタッチメントスタイルや同調傾向を併せて取り上げ検討した。

その結果、全般的な傾向の分析では距離化スキルや接近スキルが非行傾向と関連したのは中学生群においてのみであった。青年期になるにつれ、対人関係の形態や質に変化が見られることは多く指摘されている（Coleman & Hendry, 1999 など）

が、青年期前期の中学生群はそうした対人関係の広がりが始まりつつある時期と考えられる。先掲の石井・新堂では、距離化スキルが非行への参入段階にのみ影響する可能性が指摘されていたが、そのことを併せて考えると、対人関係が変化し、非行性などの社会性ステータスが確定する初期の段階が青年期前期であり、故にこの時期の社会的スキルが非行傾向へ影響を与えるとも考えられる。

しかし、その後の詳細な分析では、高校生群においても距離化スキルと非行の関連が認められ、特に逸脱した友人が周りに存在する際や、アタッチメントスタイルにおいてネガティブな他者観を対人観として有する個人に距離化スキルが奏効することが示された。ただ、高校生群における距離化スキルと非行との関連で特徴的であったのは、いずれの効果も親密性が中、低条件でのみ距離化スキルの影響が見られた点である。先述の通り、距離化スキルが非行参入にのみ影響を及ぼすとすれば、青年期中期段階である高校生においては新たな出会いである親密性が中、低の相手に対して如何に接するかが重要なかもしれない。

今後、高校生（青年期中期）やそれ以降についてより詳細に検討する必要があると考えられる。

### 調査2：社会的刺激認知との関連

#### 問題と目的

調査2では、非行傾向を有する青少年らが、対人関係にかかわる種々の社会的刺激に対して、どのような知覚・認知上のバイアスを示し得るかについて検討を行った。諸先行研究においては、非行少年及び攻撃性の高い少年らは他者の意図や表情に対して敵意を過度に誤って読み取りやすく（Dodge ら, 1990 ; 佐藤ら, 2008 など）、いわば好戦的な他者認知を行うことが示唆されている。

しかし本研究の主目的であるリスクマネジメント

トとしての距離化スキルが非行に抑制的に働くということを考えた場合、軽度非行少年は親密性の低い相手に対して、いわば無防備とも言い得るような親しげなコミュニケーションをとることが示唆されている訳であり、それからすると、非行傾向の高い青少年は悪意や搾取意図の察知および表情の読み取りの精度がより低く、特にその傾向は親密性の低い相手や、よく知らない相手との関係の文脈において、顕著に現れることも予測される。実際、非行少年らが集団的な関わりにおいて序列関係や上から下への搾取を肯定的に捉えている可能性を指摘する向きもある（松本、2009）。

そこで本調査では社会的刺激として、見知らぬ他者の表情と、他者（見知らぬ他者／既知の他者）から何らかの搾取をされるストーリーを取り上げ、他者に対する無防備な反応が見られることも想定しながら、刺激への反応傾向と非行傾向との関連を検討した。尚、調査1で青年期中期以降についてより詳細に検討する必要性が示されたことから、調査2の対象者は一般高校生と大学生とした。

## 調査2-1：表情認知との関連

（執筆担当：東京大学大学院高橋翠）

### 問題と目的

反社会的とされるような行為や、規則から逸脱した行為を行う傾向にある青年は、他者の感情の読み取りや意図の検出といった社会的認知の様式が、他の青年とは異なる可能性がある。具体的には、反社会的・逸脱行動をとりやすい青年には、特定の表情を敏感に検出したり、反対に他者がある意図を示している可能性を非常に低く見積もったりするといった、逸脱的な行為を促進するような社会的情報に対する知覚のバイアス（特異性）が存在するかもしれない。また、反社会的・逸脱的な行為をしやすい青年は、対人相互作用におい

て他の青年とは異なる目標・動機づけ（例 仲間からの注目を集めたい・他者を出し抜きたい）をもつことが想定されるため、そうした動機と合致した特定の容貌（例 幼さや向社会的な性格特性が推論される容貌）をもつ人物にとりわけ魅力を知覚しやすい（惹き付けられる）かもしれない。したがって調査2では、高校生と大学生を対象に、反社会的・逸脱傾向と(1)表情認知、(2)印象評価、ならびに(3)特定の容貌に対する選好（魅力知覚）との関連性を検討する。

### (1)表情認知

たとえ本人が無表情のつもり（いかなる表情も示していない状態）であっても、我々は容貌が手がかりとなるわずかな表情手がかりを元に、他者の感情状態を推測する傾向にあることが指摘されている（例えば、Oosterhof & Todorov, 2008）。そこで本研究では、無表情の顔写真（男女各1名ずつ）を呈示した際に、わずかな表情手がかりから個人がいかなる表情を読み取る傾向にあるのかを検討し、その際、反社会的・逸脱傾向が他者の感情状態の推察における敏感性や鈍感性と関連性を示すかどうかを吟味する。特に、反社会的・逸脱傾向を示す青年は、他者が怒りや悲しみ、恐れといったネガティブな表情を表示している可能性を低く見積もる一方で、好意（笑顔）が提示されている可能性を過剰に見積もる傾向にあるかもしれない。

### (2)印象評価・意図推論

初対面の人物に対する印象評価（性格特性や相互作用意図、能力の推論）においては、表情手がかりが重要性を帯びることが指摘されている（Oosterhof & Todorov, 2008）。したがって、特定の表情手がかりに対して特に敏感・鈍感であることは、同一人物が様々な表情を示している場合に、結果として偏った人物評価や相互作用意図の推論をもたらす可能性がある（すなわち、特定の

表情手がかりを他者推論において偏重する傾向)。例えば、他者が笑顔のような表情と怒りのような表情を同時に示している場合、怒り表情を重視する個人は、それを騙しの意図(笑顔の裏で敵意を示している)と解釈する可能性がある一方で、ポジティブ表情をより重視する個人は、そうした推論をしにくいかもしれない。したがって本研究では、反社会的・逸脱的傾向にある青年が印象判断・意図推論におけるバイアスを保持しているかどうかを検討する。反社会的・逸脱的傾向にある青年は他者の信用性や好意を過度に見積もる一方で、狡猾さや騙しの意図を低く見積もる傾向にあるかもしれない。あるいは反対に、他者の狡猾さや騙し意図に敏感になっているかもしれない。

### (3)魅力知覚

最近の顔の魅力に関する研究では、相手との相互作用時に個人がどのような目標(動機づけ)をもっているかに応じて、同性・異性の顔においてどのような容貌を好むのか(魅力として知覚するのか)が異なる可能性が指摘されている(Little et al., 2011)。先行研究ではその中でも特に、「その性らしさ(男らしさ・女らしさ)」が知覚される容貌に対する選好における個人差が検討されてきた。「女らしさ(男性では中性的な印象)」が知覚される容貌は、向社会的な性格特性や幼さが推論される一方で、「男らしさ(女性では中性的な印象)」が知覚される容貌は、攻撃性や支配性、年長であることが推論される傾向にあることが指摘されている(Perrett et al., 1998)。したがって、反社会的・逸脱的傾向を示す青年は、出し抜きや騙しが容易に行えるような印象が知覚される「女らしい」女性顔/中性的な男性顔を好むかもしれない。

## 方法

### 調査対象者

高校生：公立の M 高校と E 高校が対象となっ

た。調査は 2012 年 7 月初頭～中旬に実施された。

M 高校は授業時間に調査票を配布して一斉調査、E 高校は留置法を用いた。回答所要時間は約 20 分だった。回収した調査票のうち、性別の記入があった、男子生徒 26 名(1～3 年生、平均 16.53 歳)、女子生徒 137 名(1～3 年生、平均 16.94 歳)が分析の対象となった。

大学生：関東地方にある 2 校が対象となった。調査は 2012 年 9 月末～10 月末に実施された。回収した調査票のうち、性別が記入されており、(青年を対象としているため)年齢が 25 歳以下であった男性 78 名(18～24 歳、平均 20.17 歳)、女性 103 名(18～23 歳、平均 19.88 歳)の回答が分析の対象となった。

### 調査票の構成(表情認知に関わるもののみ)

#### 顔刺激と評定方法

高校生については、顔刺激は調査票にカラーで印刷し、大学生については、パワーポイントを使用してプロジェクタにカラーで映したものを評定してもらった(この時、スライド 1 枚につき、1 分の呈示時間を設けた)。

#### (1)表情認知

ATR 表情画像データベース(DB99)の中から、男女各 1 名の顔写真(無表情)を選択した(各 640×480pixel)。写真を呈示した後(高校生については写真の下に評定尺度を記載した)、写真の人物がいかなる感情を抱いているかを、「全くそう思わない」～「とてもそう思う」までの 7 段階で評定させた。評定させた感情は、「怖がっている」「笑っている」「悲しんでいる」「怒っている」の 4 つだった。

#### (2)印象評価・意図推論

ATR 表情画像データベース(DB99)の中から、男女各 1 名の顔写真(無表情・笑顔・怒り・悲しみ)を 1 枚ずつ選択した(各 640×480pixel)。なお、笑顔と怒り表情については、閉口して歯が見

えないものを選択した。各4枚の表情を同時に呈示し（写真は縦横2×2の位置に配置し、位置はランダムに決定した）、以下の印象評定/意図推論項目に「全くあてはまらない」～「とてもあてはまる」までの7段階で評定させた。その際、印象評定時には、写真の人物に対してどのような印象をもつと思うか、意図推論時には、評定者を見て何を考えていると思うかと尋ねた。評定させた項目は、印象評定として「信用できると思う」（信用性）、「頭のよい人だと思う」（明晰さ）、「ずるい人だと思う」（狡猾さ）、「優しい人だと思う」（優しさ）を設定した。意図推論としては、「だまそうとしている」（騙し）、「友達になりたがっている」（友好）、「馬鹿にしている」（嘲り）を設定した。

### (3) 魅力知覚

21歳～26歳の大学生・大学院生の男女各22名の無表情の写真を撮影した。撮影時にはNikon社製のCool Pix s6100を用いた。撮影協力者は前髪が顔にかからないよう、髪をピンで留めるとともに、服装の統制のため、一律に散髪用のケープを着用した。背景として白色の大判紙を使用し、被写体までの距離も統制された（被写体が座る椅子から三脚の中心が120cmになるようにした）。撮影された顔写真に対して、情報処理振興技術協会（IPA）のFaceFitならびに田上・苗村・原島（2009）による顔合成ソフトウェアを用いて、男女それぞれについて22名の平均顔を作成した後、男性顔については男性平均顔に対して女性顔を50%合成した顔（50%女性顔混交）～女性顔との共通成分を50%捨象した顔（50%男性強調顔）まで、男性顔特有の特徴が強調された容貌から女性顔の特徴が混成されたより中性的な容貌まで、10%ずつ女性顔の合成比率を変えた顔画像を11枚作成した。女性顔についても同様に、女性の平均顔に対して男性顔を30%合成した顔（30%男性顔混交）～女性顔特有の特徴を70%強調した容貌（70%女

性強調顔）を11枚作成した。なお、先行研究では一般的に女性顔ではより「女性的な（女性特有の特徴をより強調した）」容貌が魅力的と評価されることが指摘されているため（Perrett et al., 1998）、本研究ではそれほど男性顔の特徴を混交しない容貌（30%男性顔混交）～女性顔の特徴を70%強調した容貌までを刺激として作成した。顔刺激は、顔部分のみ（わずかに首部分が付随しているもの）であり、背景や髪型は含まれないものであった。魅力評定時には、作成された各11枚の顔写真を4×3のセルの中にランダムに配置して（上から3行目、右から1列目のセルは空欄だった）、11枚の中から最も男性顔/女性顔として魅力的に感じられる顔写真を1枚選んでもらった。

### 反社会的・逸脱傾向の測定

高校生：反社会的・逸脱傾向の測定として、高校生については規則からの逸脱傾向として①「病気などの理由もないのに学校をサボる」、反社会的・非行傾向として②「子どもだけで夜遅くまで遊ぶ」、2つの行動がどのくらい許容できるものであるかどうかを「まったく思わない」～「とても思う」までの4段階で尋ねた。加えて、反社会的・逸脱的行動に対する周囲の同調圧力（逸脱行為に巻き込まれる潜在的可能性）を測定する目的で、①②を行う友人が身近にどのくらいいるのかを、「まったくいない」～「3人以上いる」までの4段階で尋ねた<sup>5</sup>。

大学生：反社会的行動に対する許容度を測定する際、青年罪悪感質問紙（石川・内山、2002）を用いた（全22項目）。この尺度は元々、質問項

---

<sup>5</sup> 非行傾向の測定として、調査2では対象校からの要望に応じて、2項目のみを使用し、許容度合いと友人数に回答を求めた。調査1の結果で、非行許容度合いや友人数は非行の実際行動を強く予測することが明らかになっているため、回答は非行実際行動傾向を予測しうるものとして扱う。

目で挙げられている行為を行う際にどのくらいの罪悪感を感じるかどうかを測定するものであり、対人場面(うそをつく・だますなど)、規則場面(信号を無視する・乗車するときの割り込み行為)の2つの下位尺度から構成されている。本研究では、これらの反社会的行為に対する許容度を、「特に問題はない」～「絶対にいけない」までの4段階で評定させた。

## 結果と考察

### 反社会性の測定

高校生の反社会的・逸脱傾向の測定について、理由もなく授業を欠席することと夜遊びの容認傾向の間には有意な正の相関が認められたが( $r(159)=.40$ ,  $p<.01$ )、それほど2変数の関連性の度合いは強いものではなかった。そのため、2つの変数は反社会性の異なる側面を反映しているものとして、それぞれ個別に顔認知との関連性を検討することとした。

次に、大学生の反社会的行為に対する許容度について、尺度の信頼性分析を行った。その結果、対人場面( $\alpha=.87$ )、規則場面( $\alpha=.84$ )と、比較的高い信頼性係数が認められた。なお、反社会的行動に対する許容度については、対人場面と規則領域の間に高い正の相関関係が認められた。男性: $r(74)=.55$ ,  $p<.01$ 、女性: $r(101)=.60$ ,  $p<.01$ 。

#### (1)表情認知との関連

##### 高校生

女子：理由もなく授業をサボること、ならびに子どもだけで夜遊ぶことに対する許容度と、女性顔における悲しみ表情の認知との間に負の相関が認められた  $r(132)=-.22/-19$ 、各  $p<.05$ 。また、周囲に夜遊びする友人が多いことと、女性顔における怒り表情の認知の間にも負の相関が認められた  $r(134)=-.20$ ,  $p<.05$ 。なお、男性顔に対する表情認知と反社会的行動に対する許容度との間に明確な関連性は認められなかった。規則からの逸脱

や非行を許容しやすい女子において認められた、女性が悲しみ表情を示している可能性を低く見積もる傾向性は、本人が規則から逸脱したり、非行行為に走ったりする際に、同性の友人や養育者の悲嘆や傷つきを感知しにくい可能性を示唆する。本研究では未知の人物に対する表情認知を検討したが、同性の悲嘆や傷つきに対する鈍感性(特に母親や年長の女性の悲嘆に鈍感であること)は、反社会的・逸脱傾向にある女子が反社会的行動に対して罪悪感を感じにくく、更にそうした行為を行いやすくなることに結びつく可能性が推察される。

男子：理由もなく授業をサボることに対する許容度は、女性顔における恐怖表情の認知との間に有意傾向にある正の相関  $r(25)=.37$ ,  $p<.10$ 、女性顔における怒り表情認知との間に負の相関  $r(25)=-.50$ ,  $p<.05$  が認められた。また、理由もなく授業をサボること、ならびに子どもだけで夜遊びすることに対する許容度は、それぞれ男性顔における怒り表情認知との間に有意傾向にある負の相関関係が認められた；授業をサボること  $r(25)=-.39$ ,  $p<.10$ 、夜遊び  $r(26)=-.35$ ,  $p<.10$ 。規則からの逸脱や夜遊びが許容できると答える男子ほど、男女に関わらず、他者の怒り表情に鈍感であるという結果は、望ましくない行動(規則違反・非行行動)をとった際に与えられる他者からの叱責や非難に鈍感である可能性を示唆する。その一方で、他者の怒り(叱責)を感知しにくい青年は、過去にそうした行為を遂行した際に他者に叱責されたという意識が乏しかったために、その後も規則違反や非行行動が容認されるものだと思ひ込みやすくなっているのかもしれない。

##### 大学生

女性：対人領域における反社会的行動、社会的規則からの逸脱に対する許容度の高さは、ともに女性顔における笑顔の認知  $r(100)=.21/.21$ 、

$p<.05$ 、男性顔における笑顔の認知  $r(101)=-.19$ 、 $p<.10$  との間に負の相関関係が認められた。加えて、社会的規則からの逸脱に対する許容度は、男性顔における恐怖表情の認知と負の相関関係にあった  $r(100)=-.18$ 、 $p<.10$ 。対人相互作用場面での反社会的行動や規則違反を容認しやすい女性は、日常生活の中でそうした行為を行いやすく、常態的に他者から好意を向けられにくい結果、他者が好意（笑顔）を示している可能性を低く見積もるのかもしれない。また、反社会的行動や規則違反に対する許容度の高さが男性顔における恐怖表情認知の鈍感性と関連していたことは、反社会的行動に対する許容度の高い（それゆえ日常生活の中でそうした行為を行いやすい）女性は、他者のネガティブ感情（特に、恐怖といった関係性からの撤退に結びつく感情）に鈍感になっている可能性が示唆される。

**男性：**対人関係における反社会的行動、ならびに社会的規則に対する逸脱傾向の高さと女性顔における表情認知の間に明確な関連性は認められなかった。しかし、男性顔においては、対人領域における反社会的行動と笑顔の認知に有意傾向にある負の相関関係が認められた  $r(73)=-.22$ 、 $p<.10$ 。女性と同様、対人相互作用場面での反社会的行動や規則違反を容認しやすい男性は、日常生活の中でそうした行為を行いやすく、他者から好意を向けられにくいために、同性である男性が好意（笑顔）を示している可能性を低く見積もるのかもしれない。

## (2)印象評価との関連

### 高校生

**女子：**理由なく授業を欠席することに対する許容度と、女性に対する明晰さ、狡猾さ、優しさの認知の間に負の相関関係が認められた ( $r(134)=-.21/-17/-21$ ,  $p<.05/.10/.05$ )。また、理由なく授業を欠席することに対する許容度、ならび

に子どもだけで夜遊びすることに対する許容度は、それぞれ男性顔に対する騙し意図の認知と有意な負の相関関係にあった ( $r(134)=-.18/-20$ 、 $p<.05/.05$ )。一方で、理由なく授業を欠席する友人の多さは、男性顔における騙し意図の検出との間に正の相関関係にあった ( $r(134)=.14$ 、 $p<.10$ )。規則から逸脱することに対して許容的な女子は、過去に（あるいは日常的に）そのような行為を行ったとき、相手からそれを容認されたり、見過ごされたりした経験を積んだことで、他者がそれほど賢くなく、騙しやすい存在だと感じるようになったのかもしれない。また、それと同時に、授業への欠席や夜遊びに容認的な女子ほど、男性が自分を騙そうとしている可能性を低く見積もる傾向にあった。以上の結果は、潜在的に規則から逸脱したり、非行に結びつく行動を行いやすい女子は、他者の狡猾さや悪意を低く見積もる一方で、反対に自らは他者を出し抜けるという信念を抱いている可能性を示唆する。

**男子：**理由なく授業を欠席する友人の多い者ほど、女性顔において明晰さを敏感に知覚する傾向にあった  $r(25)=.51$ 、 $p<.05$ 。また、子どもだけで夜遊びする友人が多いと答えた者ほど、女性顔において狡猾さをあまり認知しない傾向にあった  $r(26)=-.36$ 、 $p<.10$ 。更に、理由なく授業を欠席することに対する許容度の高さ、およびそうした行為を行う友人の多さは、男性顔における明晰さの認知と正の相関関係にあった  $r(25)=.35/.57$ 、 $p<.10/.001$ 。また、子どもだけで夜遊びすることに対する許容度の高さと、そうした行為を行う友人の多さは、男性に信頼性を認知しにくいことと関連していた  $r(26)=-.43/-43$ 、 $p<.05/.05$ 。高校生の男子においては、女子青年とは異なり、規則からの逸脱に対する許容度は、女性顔・男性顔に明晰さを知覚しやすいことと関連していた。

## 大学生

**女性**：対人領域における反社会的傾向に対する許容度の高さは、女性顔における信用性、明晰さ、ならびに狡猾さの認知との間に正の相関関係にあった  $r(99)=.21/.24/.25, p<.05/.05/.05$ 。また、規則からの逸脱行動は女性顔における信用性、明晰さ、ならびに狡猾さとの間で正の相関関係にある一方で  $r(99)=.24/.27/.18, p<.05/.01/.10$ 、嘲りの認知とは負の相関関係にあった  $r(98)=-.21, p<.05$ 。男性顔においては、反社会的傾向と印象評定の間に特筆すべき関連性は認められなかった。嘘をつく・他者を出し抜くといった対人関係における反社会的な行動、および規則違反に対して許容的な女性は、日常生活の中で女性に対してそうした行為を試みようとするために、同性の明晰さや狡猾さの情報に敏感になっている可能性がある。

**男性**：対人領域における反社会的行動に対する許容度の高さは、女性顔における明晰さ認知との間で負の相関関係にあった  $r(74)=-.23, p<.05$ 。また、規則からの逸脱に対する許容度の高さは、女性顔における友好意図の認知と負の相関関係にあった  $r(74)=-.30, p<.01$ 。ただし、男性顔の認知においては、反社会的傾向性との関連性において特筆すべき点は認められなかった。男性においては、反社会的行動に対する許容度と女性顔の明晰さ・狡猾さの認知に負の関連性が認められ、女性とは正反対の結果が認められた。今後は、反社会的行動を行う理由や状況におけるジェンダー差について、精緻に検討する必要があると考えられる。

### (3)魅力知覚

#### 高校生

**女子**：授業欠席を容認する傾向にある女子ほど、わずかに「男らしい」男性顔を好む傾向性にあることがわかった  $r(133)=.15, p<.10$ 。「男らしさ」が知覚される容顔ほど、年齢が高く見積られる傾向にあることが指摘されている。ただし、「男ら

しさ」が知覚される容顔からは、同時に攻撃性や支配性といった反社会的な性格特性も推論される。したがって、学校における規範からの逸脱に対して寛容な女子ほど「大人っぽい」容顔の異性を好むという結果は、規則違反をしやすい女子は、潜在的に学校外における反社会的な大人（男性）との関係に巻き込まれやすい危険性を孕んでいる可能性を示唆する。

**男子**：友人に夜子どもだけで遊びに出かける者が多いと答える男子ほど、より「女性的な」女性顔を好む傾向にあった  $r(25)=.54, p<.01$ 。「女性らしい」印象を与える容顔は、化粧によって強調することができる。夜遊びする女性の友人には、化粧でそうした容顔を強調する者が多く、そうした容顔を見慣れることによって、選好が生じるのかもしれない。あるいは、女性顔において「女性的な」容顔は繁殖力の高さを示すシグナルでもある (Little et al., 2011)。逸脱した行動をとる友人に囲まれている男子は、たとえそうした行動をとることに對して自分自身が許容的でなくても（実際に、夜遊びに対する許容度と友人の数に有意な相関は認められなかった  $r(25)=.20, n.s$ ）、周囲に夜遊びを行う同性友人が多いことで潜在的にパートナー選択に動機づけられているために、配偶者選択において進化生物学的に重要な刺激（女性顔において「女らしい」容顔）に惹き付けられる傾向にあるのかもしれない。

#### 大学生

男女共に、反社会的傾向（対人的領域・社会的規則に関する領域）と「その性らしい」容顔に対する選好に関連性は認められなかった。

### 調査 2-1：総合考察

本研究では、青年（高校生・大学生）における反社会的・逸脱傾向と顔認知（表情認知、印象/意図の推論、魅力知覚）の関連性を検討した。そ



の結果、高校生において規則違反や非行を許容しやすい青年ほど、他者がネガティブ表情（怒りや悲しみ）を示している可能性を低く見積もる傾向にある可能性（表情認知における鈍感性）が示された。これは、反社会的行動に従事しやすい青年ほど、他者の非難や叱責、悲嘆に対して鈍感である可能性を示唆する。したがって、潜在的に反社会的・逸脱的行動を行いやすい青年に対しては、そうした行動企図の兆候が認められた際には、より明確に（やや強調したかたちで）、そうした行為は他者から非難されるものであることや、他者を傷つける可能性があるものであることを伝えていく必要があるかもしれない。また、本研究では特に高校生の女子において、規則からの逸脱や非行行動を容認しやすい者ほど、他者（同性）の明晰さや狡猾さを低く見積もると同時に、他者が悪意（自らを騙す意図）を抱いている可能性を低く見積もる傾向性が見出された。また、規則からの逸脱傾向を示す女子ほど、より「大人びた」（また、同時に反社会的な性格特性が知覚される）容貌の男性を好む傾向が認められた。この結果は、規則からの逸脱や非行に結びつき得る行為（夜遊び）に対して容認的な態度をもつ女子青年は、反社会的な行為に巻き込まれるリスクを、青年自身の価値観（反社会的行動を容認する態度）に加えて、対人相互作用場面での他者の社会的情報の読み取り（認知・検出）のバイアスという形で、二重に保持している可能性を示唆する。具体的には、反社会的行動に対して容認的な態度をもつ女子青年は、同性の明晰さや狡猾さを低く見積もる一方で、悪意の意図を知覚しにくいことで、望ましくない同性友人からの悪意ある教唆に乗りやすく、より重篤な反社会的行動（犯罪）に巻き込まれやすくなっているかもしれない。特に女子青年において、知らず知らずのうちに他者から巻き込まれる的に犯罪に手を染めてしまう者が多いこと、そして女子

の場合、特に性非行の裏には多くのケースで反社会的な成人男性（「大人びた」男性）が存在することを考慮すると、今後は反社会的・非行傾向にある少年少女が保持する、彼ら特有の社会的認知のバイアスについて、より詳細に検討することが急務であると考えられる。また、本研究の知見は、反社会的・非行傾向にある青年に対して臨床・教育的支援および介入を行っていく際に、彼らが対人相互作用場面において他の青年とは異なる社会的情報の知覚様式を備えていることを意識する必要があることを示唆する。最後に、本研究では高校生における反社会的行動の容認傾向と社会的認知におけるバイアスと、大学生におけるそれとの関連性があまり明確に示されなかった（反社会的傾向性と社会的認知のバイアスの関連性が、高校生と大学生で一貫性しなかった）。例えば、高校生においては、規則からの逸脱（授業をサボること）に対する許容度は他者の明晰さの知覚と負の関係にある一方で、大学生においては社会的規則から逸脱した行動をとることに対する許容度は他者の顔から明晰さを知覚しやすいことと関連していた。高校生と大学生の結果の齟齬について、本研究では反社会的傾向の測定にあたって高校生と大学生で異なる尺度を用いたことが原因の一つである可能性が推察されるものの、今後は反社会性と社会的知覚におけるバイアスとの関連について、発達的变化も含めて検討することが求められるだろう。

## 調査 2-2 : シナリオ呈示課題への反応

### 問題と目的

先述した通り、非行少年らの対人的情報処理については彼らの対人認知がネガティブに偏りがちな一方で、集団内外の搾取や上下関係に対して肯定的な信念を持っていることが伺われる。そこで本調査ではシナリオ呈示課題を行って、非行傾向の高低によって他者からの搾取場面を想起するよ

うなストーリーへの反応がどのように異なるかを検討した。この課題では、他者からの搾取に対してどのように反応するのかを検討する。非行少年らが搾取構造をより肯定的に捉えているならば、他者からの搾取に対してネガティブな反応を示さない等、非行傾向の低い個人とは異なる傾向が見られるかもしれないと予測した。

## 方法

シナリオ課題の調査は表情認知課題と同時に行われたため、対象者や時期等は表情認知課題と一部重複している。

### 調査対象者

表情認知課題の節で記されていた M 高校と E 高校生。男子生徒 26 名 (1~3 年生、平均 16.53 歳)、女子生徒 137 名 (1~3 年生、平均 16.94 歳)。

調査票の構成 (シナリオ呈示課題に関わるもののみ)

### 刺激文と評定方法

文中の主人公が相手からやや反社会的な行動を請われ、何らかの資源を搾取されるストーリーを設定し、その相手が未知 (初対面) か既知 (顔見知り) かと、主人公の行為に対して報酬があったかなかったかの組み合わせで 4 通りの文を刺激分として呈示した (表 1)。なお、文中の主人公は対象者と同性とするよう教示をした。それぞれの文章に対して、(a) 相手はどの程度信頼できると考えるか (4 件法)、(b) 主人公のその後の情動の予測 (Izard の分離情動の尺度を参考として、喜び、悲しみ、怒り、恥、興味、自己嫌悪、恐怖、誇り、後悔、照れ、嫌悪、(相手に対する) 軽蔑の 12 情動を設定し、経験なし/あり/特に強くありの 3 件法で問うた)、(c) 自分が主人公だった場合、相手の要求に答えるか否か (はい/いいえの 2 件法) を問うた。

表 1 呈示した刺激文

【文章 1 (既知の他者、報酬無し)】主人公: A, 相手: B  
A さんは、~~テモト~~の前日、真夜中に家で勉強していた。~~すゝ~~と友達 B さんがやめてきて、「これから花火をして遊びたいんだけど、今花火とライターある?」と聞いてきました。A さんは B さんに付いていき、家にあった花火とライターを B さんに渡しました。B さんは何も言わずに受け取り、二人は花火で遊びました。

【文章 2 (未知の他者、報酬あり)】主人公: C, 相手: E  
C さんは友達 D さんと遊ぶ約束をしていました。すると、友達 D さんが C さんの知らない人と一緒にやってきました。友達 D さんはその知らない人のことを「E 先輩」と呼んでいました。C さん達は 3 人で一緒に遊びに行くことにしました。歩いていると、道路に自転車が 3 台置かれていました。「E 先輩」は、「この自転車に乗って行こうよ」とそのうちの 1 台に乗りました。E さんが自転車に乗ると、「E 先輩」は「度胸があるな、仲間に入れてやる」とほめました。

【文章 3 (未知の他者、報酬無し)】主人公: F, 相手: G  
E さんがゲームセンターで遊んでいると、近くの高校の生徒だと知ると G さんが声を掛けてきました。G さんは F さんと同年代のようでした。しばらく一緒に遊んでいると、G さんが「あそこに誰かの忘れた景品が落ちている。あいつと持ってきてくれる?」と言いました。F さんが景品を持ってくると G さんはそれを受け取り、自分の鞆の中に入れました。

【文章 4 (既知の他者、報酬あり)】主人公: H, 相手: I  
H さんが朝教室にみると友達の I さんがぎゅってきて、「宿題をするのを忘れちゃったから急いで写させて」と言いました。H さんが自分の宿題を見せて写させると、I さんは「ありがと」と言い、家に帰ってからお礼としてお菓子をくれました。

## 反社会的・逸脱傾向の測定

表情認知課題と同一の変数を用いた。

## 結果

### 相手に対する信頼度の検討

各刺激文に登場する相手に対する信頼得点を従属変数として、非行傾向の高低×刺激文の 4 条件 (既知の相手搾取あり、既知の相手報酬なし、未知の相手報酬あり、未知の相手報酬なし) の 2 要因分散分析を男女毎、非行種類毎 (理由無く授業を欠席することの許容/友人、夜遊びの許容/友人) に行った。

その結果、刺激文の条件の主効果が男女共に認められた（女子； $F(3, 393)=227.36$ 、男子； $F(3, 66)=29.00$ 、共に  $p<.001$ 、既知相手の報酬あり>既知相手の報酬無し>未知相手の報酬無し、未知相手の報酬あり）（図 15, 16）。

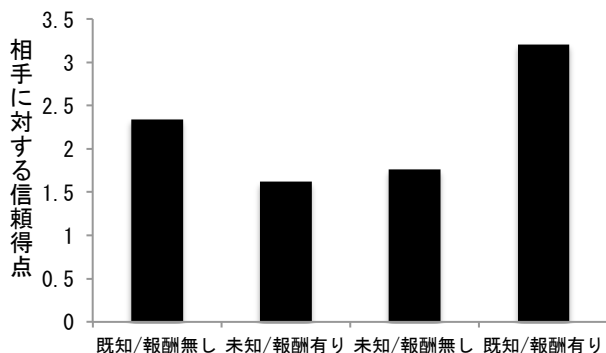


図 15. 男子の、刺激文の相手に対する信頼得点

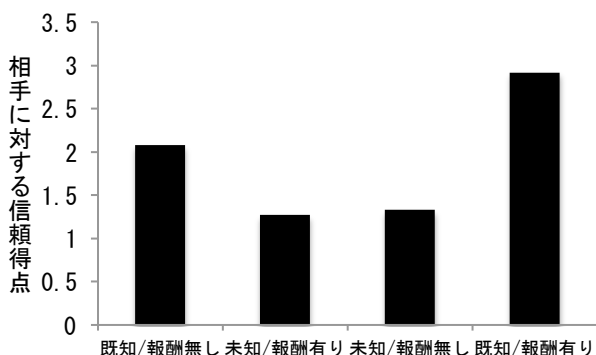


図 16. 女子の、刺激文の相手に対する信頼得点

非行指標の主効果は、女子における授業欠席の許容度 ( $F(1, 131)=3.78$ ) と、夜遊び友人数 ( $F(1, 131)=3.03$ ) が有意傾向だったのみであった(共に  $p<.1$ )。その後、 $t$  検定を行ったところ、授業欠席の許容度による群分けでは、未知の相手に報酬あり条件 ( $t(132)=-2.26, p<.05$ ) と、未知の相手に報酬無し条件 ( $t(121.34)=-1.82, p<.1$ ) において有意差・有意差傾向が認められ、いずれも許容度が高い群の方が低い群よりも信頼得点が低かった。夜遊び友人数による群分けでは、未知

の相手に報酬無し条件においてのみ有意差が認められ、夜遊び友人数が多い群の方が少ない群よりも信頼得点が低かった ( $t(68.59)=-2.81, p<.05$ ) (図 17, 18)。

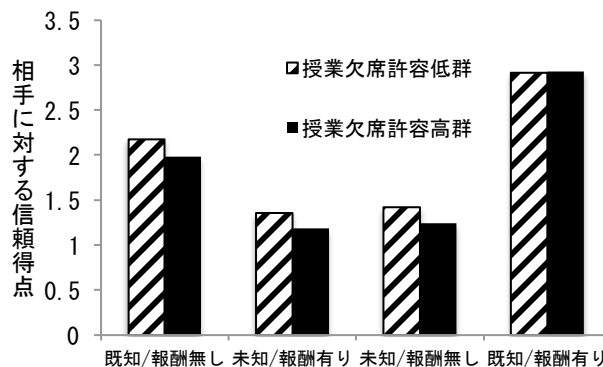


図 17. 女子の授業欠席許容度による、条件別信頼得点

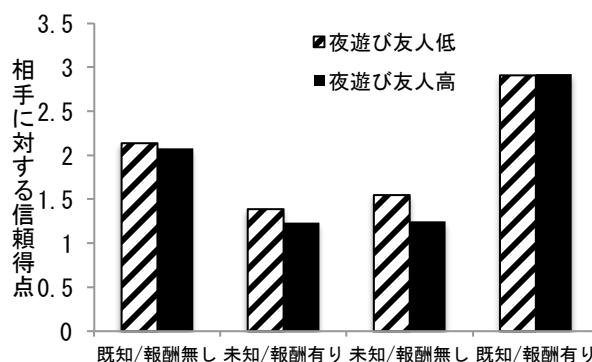


図 18. 女子の夜遊び友人数による、条件別信頼得点

### 情動反応との関連

刺激文中の主人公が経験する情動反応の予測について、得られた回答をその情動を経験すると予測（「あり」、「特にあり」と回答したもの）したか経験しないと予測したか（「なし」と回答）の 2 カテゴリーにわけ、条件と非行指標の群別にどの情動経験が推測されるのかをクロス集計し、 $\chi^2$  検定を行った。

**女子：既知の相手、報酬無し条件** 女子の授業欠席友人数による群分けで後悔経験予測に有意差が認められ ( $\chi^2=4.90, df=1, p<.05$ )、低群ほど、

後悔を予測しやすいことが示された（図 19）。

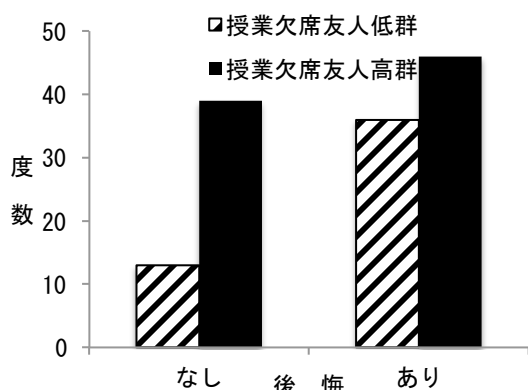


図 19.女子の授業欠席友人数による、後悔経験予測度数(既知相手、報酬無し条件)

未知の相手、報酬あり条件 授業欠席友人数による群分けで悲しみ ( $\chi^2=5.18, df=1, p<.05$ ) と恐れ ( $\chi^2=6.26, df=1, p<.05$ ) 経験予測に、授業欠席許容度による群分けで恐れ経験予測 ( $\chi^2=5.08, df=1, p<.05$ ) に、夜遊び友人数による群分けで恐れ ( $\chi^2=3.84, df=1, p<.05$ ) と軽蔑 ( $\chi^2=4.91, df=1, p<.05$ ) 経験予測に、夜遊び許容度による群分けで軽蔑経験予測 ( $\chi^2=4.25, df=1, p<.05$ ) に有意差が認められた。

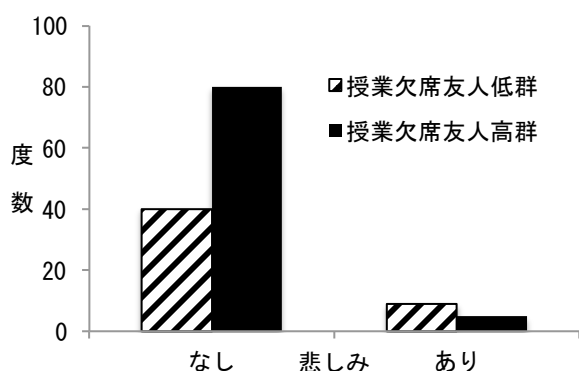


図 20.女子の授業欠席友人数による、悲しみ経験予測度数 (未知相手、報酬あり条件)

軽蔑経験は、夜遊び友人数や許容度が高い群の方が予測しやすく、反対に悲しみ、恐れ経験予測

は授業欠席友人数、許容度、夜遊び友人数共に低い群の方が多かったことが示された（図 20～図 25）。

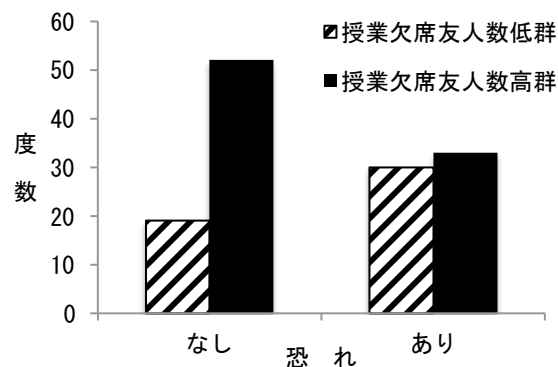


図 21.女子の授業欠席友人数による、恐れ経験予測度数(未知相手、報酬あり条件)

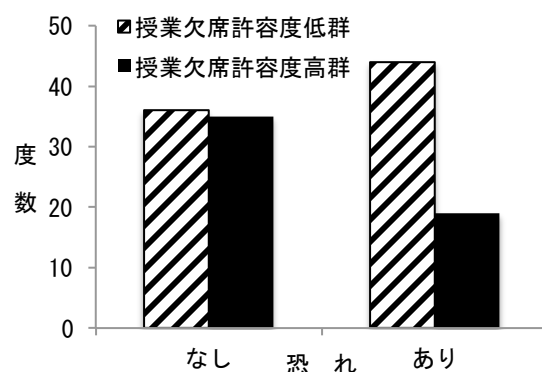


図 22.女子の授業欠席許容度による、恐れ経験予測度数(未知相手、報酬あり条件)

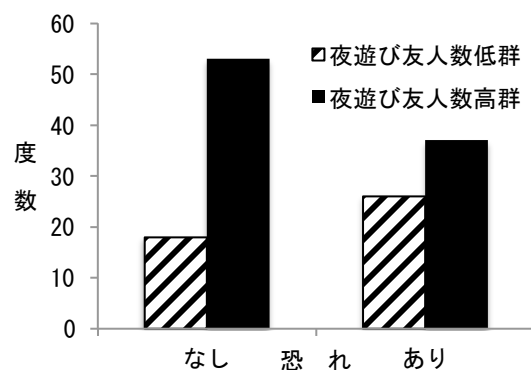


図 23.女子の夜遊び友人数による、恐れ経験予測度数 (未知相手、報酬あり条件)

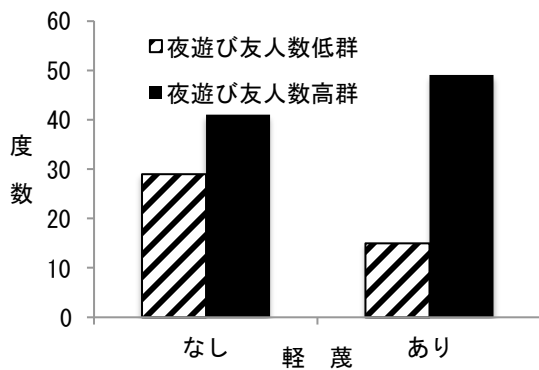


図 24.女子の夜遊び友人数による、軽蔑経験予測度数（未知相手、報酬あり条件）

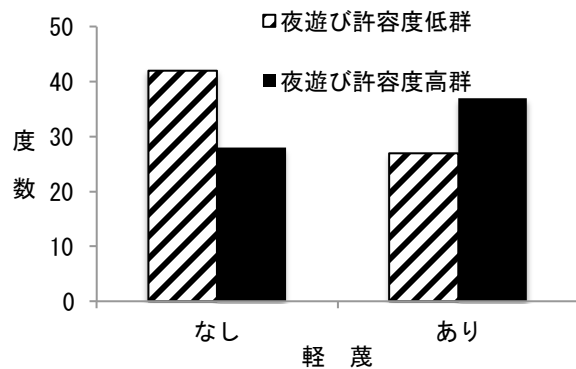


図 25.女子の夜遊び許容度による、軽蔑経験予測度数（未知相手、報酬あり条件）

未知の相手、報酬無し条件 授業欠席友人数による群分けで恥経験予測 ( $\chi^2=3.91, df=1, p<.05$ ) に、授業欠席許容度による群分けで後悔経験予測 ( $\chi^2=8.39, df=1, p<.01$ ) に、夜遊び許容度による群分けで後悔経験予測に ( $\chi^2=7.94, df=1, p<.01$ ) 有意差が認められた。恥経験予測は授業欠席友人数の高い群で、後悔経験予測は授業欠席許容度及び夜遊び許容度の低い群で特に多かったことが示された (図 26～図 28)。

既知の相手、報酬あり条件 授業欠席許容度による群分けで自己嫌悪経験予測に ( $\chi^2=4.84, df=1, p<.05$ )、夜遊び許容度による群分けで恥経験予測に ( $\chi^2=3.88, df=1, p<.05$ ) 有意差が見られた。自己嫌悪、恥共に授業欠席許容度、夜

遊び許容度が低い群ほど、多く予測していた (図 29, 30)。

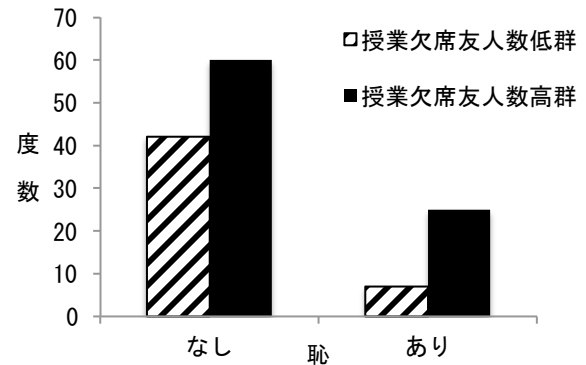


図 26.子の授業欠席友人数による、恥経験予測度数（未知相手、報酬無し条件）

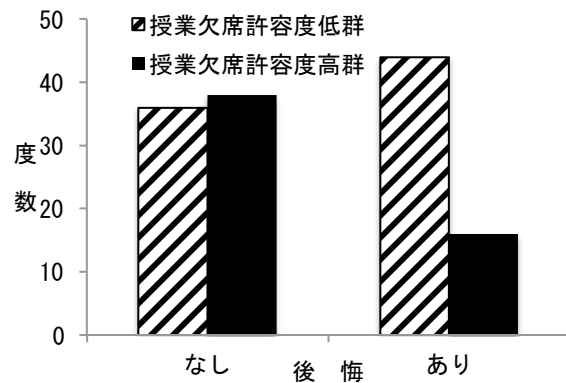


図 27.女子の授業欠席許容度による、後悔経験予測度数（未知相手、報酬無し条件）

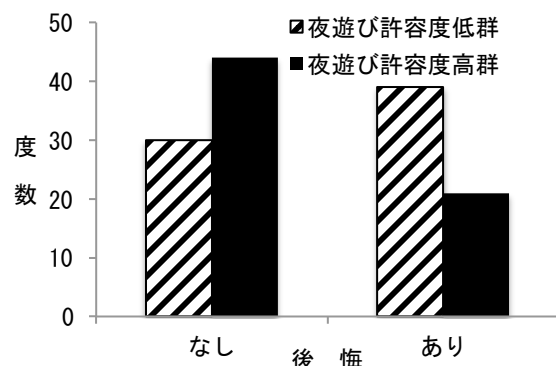


図 28.女子の夜遊び許容度による、後悔経験予測度数（未知相手、報酬無し条件）

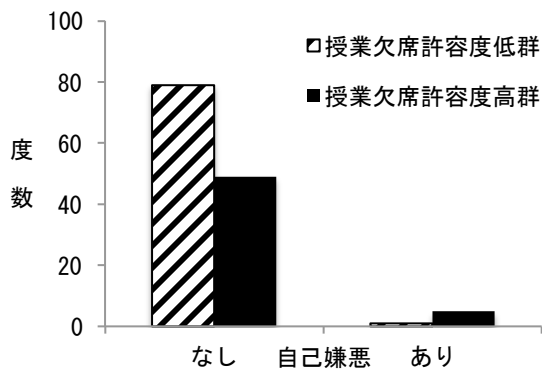


図 29.女子の授業欠席許容度による、自己嫌悪経験予測度数（既知相手、報酬あり条件）

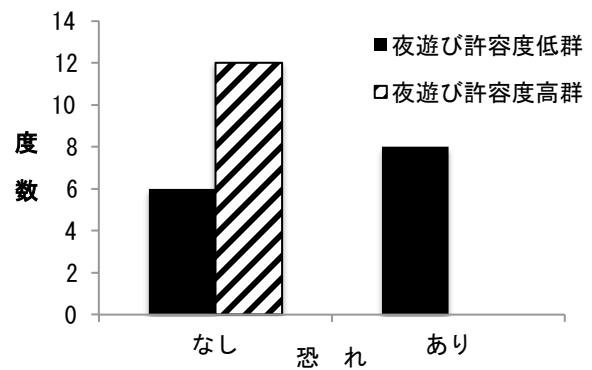


図 31.男子の夜遊び許容度による、恐れ経験予測度数（未知相手、報酬あり条件）

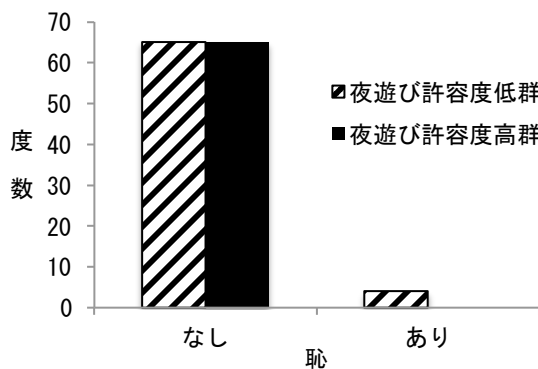


図 30.女子の夜遊び許容度による、恥経験予測度数（既知相手、報酬あり条件）

男子：既知の相手、報酬無し条件 非行指標の群分けによる情動経験予測に、有意な差は認められなかった。

未知の相手、報酬あり条件 夜遊び許容度による群分けで、恐れ経験予測に有意差が見られた ( $\chi^2=9.91, df=1, p<.01$ )。恐れは、夜遊び許容度が低い群ほど多く予測することが示された (図 31)。

既知の相手、報酬あり条件 夜遊び許容度による群分けで、嫌悪経験予測に ( $\chi^2=4.84, df=1, p<.05$ )、夜遊び友人数による群分けで恥経験予測に ( $\chi^2=4.84, df=1, p<.05$ ) それぞれ有意差が見られた。嫌悪、恥共に、夜遊び許容度や友人数が低い群ほど、多く予測したことが示された (図 33, 34)。

未知の相手、報酬無し条件 夜遊び許容度による群分けで、嫌悪経験予測に有意差が見られた ( $\chi^2=4.47, df=1, p<.05$ )。夜遊び許容度が低い群程、嫌悪経験を多く予測したことが示された (図 32)。

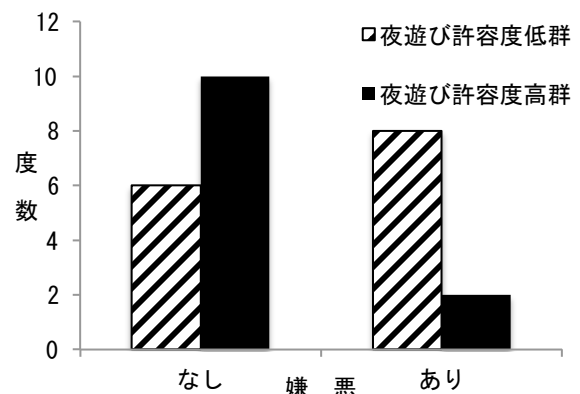


図 32.男子の夜遊び許容度による、嫌悪経験予測度数（未知相手、報酬無し条件）

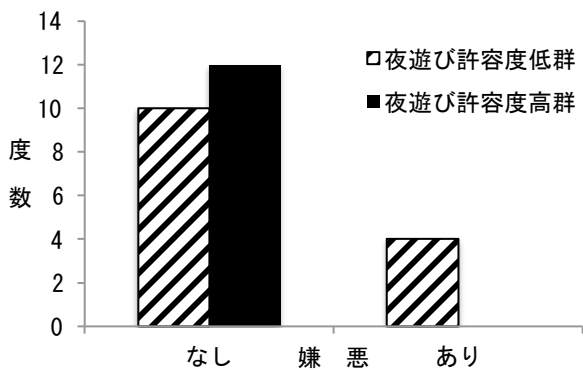


図 33.男子の夜遊び許容度による、嫌悪経験予測度数（既知相手、報酬あり条件）

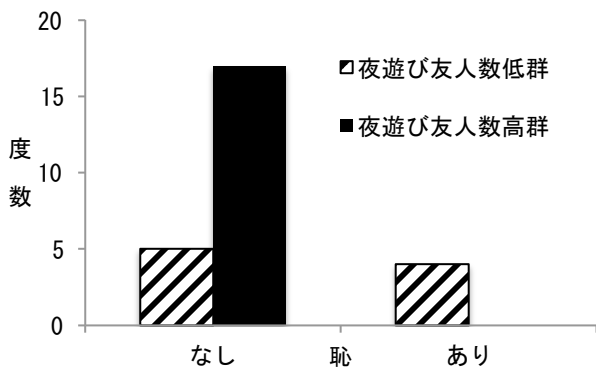


図 34.男子の夜遊び友人数による、恥経験予測度数（既知相手、報酬あり条件）

### 調査 2-2 : 考察

ストーリー中の人物に対する認知について、非行性の高低によって部分的に違いが見られた。

まず、主人公に対して搾取をしてくる相手への信頼は、女子にのみだが、特に未知の相手に対して非行性がより高い群の方が低かった。これは本研究が想定していた非行少年の、相手に対する無防備さとは異なる結果であった。

次に情動反応予測については、全体を通して、非行性が低い群の方が他者からの搾取を受けた主人公に対して、後悔、悲しみ、恐れ、恥といったネガティブな情動反応をより多く予測していた。搾取を含んだストーリーに対してこれらのネガテ

ィブな情動反応を予測できることは、自らが逸脱した集団や搾取されそうな構造などに実際に巻き込まれそうになった際、その状況からの脱出を強く動機付けることができるのかもしれない。この傾向は女子において顕著であったが、これも女子非行の対人関係上の問題が特に強いことと関連しているかもしれない。

一方で、女子においてのみだが、非行性が高い群の方が、特に未知の相手条件で軽蔑や恥を多く経験していた。軽蔑という他者に対するネガティブな情動反応は、先行研究で報告されていた、他者に対する好戦的でネガティブな認知と整合するものと考えられる。しかし、恥情動に関しては解釈がやや難しい。今後、より詳細な検討が必要になるだろう。

### 調査 2 : 総合考察

調査 2 では、対人的情報処理について、表情認知と、ストーリー呈示による他者認知から、非行傾向を有する個人に特異的な情報処理傾向を検討した。その結果、非行傾向を有する群の特徴として、他者に対する笑顔の認知の低さや、狡猾さへの敏感性、信頼度の低さなどといった従来研究で指摘されてきたネガティブな他者観と一致する結果と、相手への怒りや狡猾さ、悪意への鈍感さや、搾取された主人公の情動反応としてネガティブな情動を予測しにくいなどといった、本研究が想定してきた他者に対する無防備さをうかがわせる結果の双方が同時に認められた。

先述した松本(2009)では、不良少年らを対象とした雑誌のインタビュー記事を資料として、非行少年らが自身よりも上位の逸脱他者に対しては搾取される側に、より下部の集団に対しては搾取する側に回ることで、上から下へ搾取が展開していく様子を「恐喝のピラミッド」ととらえたが、これは今回の結果で他者に対する無防備な認知と、

好戦的な認知が同時に見られたこととも関連するのかもしれない。非行少年らの認知パターンを単純に好戦的なものとする理解には限界があり、彼らはそうした傾向と併せて、逸脱他者によりだまされやすい認知傾向が備えられていることを看過することはできないだろう。こうした彼らの対人認知におけるアンバランスさや二重性をより詳細に捉えるためには、実態に踏み込んで、上下関係を考慮した検討が今後必要だと考えられる。

ただし、先行研究においてこうした認知の二重性が想定されなかった理由としては、先掲した Dodge らや佐藤らの調査対象が男子のみであったためとも考えられる。本調査での傾向は表情認知課題でもシナリオ呈示課題でも、女子においてより顕著に示された。先述したとおり女子非行は対人関係上の問題がより強いと指摘されている。非行少年らを対象とした研究はサンプルの少なから女子へ目を向けられることが少ないが、女子特有の傾向についても検討する重要性が本調査から示唆されたといえるだろう。

### 調査3：非社会群の調査

本研究は青年期の非行傾向及び、反社会性について検討するものではあるが、彼らの特異性を考察する際には、非行傾向を有しない層との比較が必須である。調査1、2では、非行傾向の低い群をその比較対照群としていたが、青年期の社会性と対人関係の関連を幅広く捉える為には、もう一つの不適応群として、非社会性を有する個人の自己他者観やコミュニケーションスタイルについて明らかにすることもまた重要であろう。そこで調査3として、青年期～成人期の口唇口蓋裂者を潜在的な非社会群と、彼らの自己や他者に対する信念を検討した。ただし、本研究計画中では対象者や得られたデータが限定的であったため、ここでは簡単に概要を述べるにとどめる。

### 概要

成人期口唇口蓋裂 (CLP) 者 20 名 (男性 8 名, 女性 12 名, 平均年齢 25, 3 歳 (21 歳から 32 歳), 両側性口唇口蓋裂 [BCLP] 6 名, 片側性口唇口蓋裂 [UCLP] 14 名) を研究協力者として, 1 時間から 1 時間半程度の半構造化面接を行った。研究協力者は, 診察後に主治医と研究者から調査にあたって事前に調査についての説明を受け, 書面で合意した。インタビューは, 児童期から現在 (成人期) までの CLCP に関わる経験について自己と対人関係の 2 側面から尋ねた。語りは, 研究協力者の同意下で MD 録音され, データは全てテキストデータ化された。全研究協力者について, 主治医に臨床上の印象 (治療の支持・不支持, 心理的適応) を尋ねた。

口唇裂口蓋裂者では, 児童期から思春期/青年期, 成人期にかけての各発達期において疾患に関連する自己の意味づけが変化することが報告されている (松本, 2009)。しかし, その変化パターンの個別性は, 十分に明らかになっていない。

そこで, 複数の青年期～成人期口唇裂口蓋裂者に対して面接を行って, 疾患に関連する回想的な自己の語りをから見いだされた意味づけの変化プロセスについて, Fogel et al. (2006) の理論的枠組みを援用し, 特に疾患と自己との関係が強く意識される児童期と思春期に焦点化した類型化を試みた。

### 総合考察

本研究の目的は, 非行傾向がある青年らの対人関係上の特異性を, 特にリスク回避上の問題に着目して検討することであった。全ての調査を通して, 非行と関連する対人関係上の諸要因が明らかにされた。

まず, リスク回避に奏功すると想定されていた対人的距離化スキルは, 条件や発達段階によって



効果の表れ方が異なっていたものの、全般的に距離化スキルは対人関係の取り結び段階で影響を与えることが示唆され、また逸脱した友人が実際に多く存在する場合や、元々の信念として対人的に回避傾向を有する個人において特に非行抑制の効果が見られることが明らかになった。非行に抑制的に働く対人関係行動として、回避や欺瞞を駆使して相手との適切な距離を図る距離化スキルが重要であることが新たに示されたといえよう。

その後の対人関係情報処理傾向については、非行性の高い群における特徴として、他者に対して好戦的かつネガティブな認知を行う一方で、無防備ともいえる認知傾向も有していることが明らかとなった。

しかし、こうした認知傾向が実際にどのような行動を介して非行へ繋がるのか、また今回示唆された認知の二重性（好戦的な一方で、無防備であること）が、想定している通り、非行少年らにおける搾取構造を規定しているのかについては明らかになっていない。今後、認知と行動面、コミュニケーションの相手として上下関係別の設定を併せた検討も要されるだろう。

しかしながら、本研究によって、青年期の非行への参入に、リスク回避力の低さが関わっていると一定程度示されたことは、今後の非行予防や矯正教育へ意義があると考えられる。現在、非行少年らの矯正教育として既に SST が実施されており、非行への巻き込まれも問題として想定されているが、対人的距離化スキルに該当する方略を積極的に指示してはいない。回避や欺瞞等を含んだ言動は、介入の場面で薦めるのが難しいかもしれず、また、単なる主張や親和と比べて複雑なので技能として機械的に覚えるのが少年らにとっても困難かもしれない。対人的距離化を実践へ取り入れる際には、これらの点を鑑みて、適切な指導法を考慮する必要があるだろう。

最後に、本研究での結果は全体を通して女子において特に顕著に認められた。度々触れた通り、女子非行における対人関係上の問題がより色濃く見られることは既に多く指摘されている。非行少年全体における女子非行の割合は少ないものの、一方で売春など男子にはあまり見られない女子独特の非行もあり、女子非行は特に分離して対人関係上の問題を詳らかにする必要があるだろう。

## 文献

Agnew,R. (1991). The interactive effects of peer variables on delinquency. *Criminology*, **29**,47-72.

相川 充 (1995). 矯正施設での社会的スキル訓練について 刑政, **106**, 16-26.

Akers, R. L. , Krohn, M. D. , Lanza-Kaduce, L. , et. al (1979). Social Learning and Deviant Behavior: A Specific Test of a General Theory. *American Sociological Review* **44**,636-655.

Allen,J. P. , Marsh,P. , McFarland,C. , McElhaney,K. B. , Land,D. , Jodl,K. M. , & Peck,S. ,(2002). Attachment and Autonomy as Predictors of the Development of Social Skills and Delinquency During Midadolescence . *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **70**, 56-66.

Chung,H. L. , & Steinberg,L. (2006). Relations Between Neighborhood Factors, Parenting Behaviors, Peer Deviance, and Delinquency Among Serious Juvenile Offenders . *Developmental Psychology*, **42**,319-331.

Dodge,K.A., Price,J.M., Bachorowski,J.A.,&

- Newman, J.P. (1990). Hostile Attribution Biases in Severely Aggressive Adolescents. *Journal of Abnormal Psychology*, **99**, 385-392.
- Fogel, A., Garvey, A., Hsu, H., & West-Stroming, D. (2006). *Change processes in relationships: A relational - historical research approach*. New York: Cambridge University Press.
- Freedman, B., Rothenthal, L., Donahoe, C., et al. (1978). A Social-behavioral Analysis of Skill Deficits in Delinquent and Nondelinquent Children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **46**, 1448-1462.
- Gaffney, L., & McFall, R. (1981). A comparison of Social Skills in Delinquent and Nondelinquent Adolescent Girls. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **49**, 959-967.
- Gottfredson, M., & Hirschi, T. (1990). *A general theory of crime*. Palo Alto, CA: Stanford University Press.
- Hart, J. L., O'Toole, S. K., Price-Sharpes, J. L., et al. (2007). The Risk and Protective Factors of Violent Juvenile Offending: An Examination of Gender Differences. *Youth Violence and Juvenile Justice*, **5**, 367-384.
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Conceptualizing romantic love as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- 石井佑可子 (2007). “メタ・ソーシャルスキル”測定尺度作成の試み 京都大学大学院教育学研究科紀要, **53**, 286-298.
- 石井佑可子・新堂研一・遠藤利彦 (2007). 在宅非行少年における社会的スキル行使の様相 (1)—対照群との比較から— 日本社会心理学会第 48 回大会／早稲田大学／日本社会心理学会第 48 回大会論文集 pp480-481.
- 石井佑可子・新堂研一(2011). 在宅非行少年における社会的スキルの様相 —メタ認知・対人的距離化スキルの観点から— 臨床心理学, **11**, 65-76.
- 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日瀉淳子・森口竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究, **20**, 125-133.
- 石川隆行・内山伊知朗(2002). 青年期の罪悪感と共感性および役割取得能力の関連. 発達心理学研究, **13**, 12-19
- Izard, C.E., Libero, Putnam, & Haynes (1993). Stability of Experiences and Their Relations to Traits of Personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 847-860.
- Kruh, I. P., Frick, P. J., & Clements, C. B. (2005). Historical and personality correlates to the violence patterns of juvenile tried as adults. *Criminal Justice and Behavior*.
- Little, A.C., Jones, B. C., & DeBruine, L. M. (2011). Facial attractiveness: evolutionary based research. *Philosophical Transactions of the Royal Society B: Biological Sciences*, **366**, 1638-1659
- 松本学 (2009). 口唇裂口蓋裂者の自己の意味づけの特徴 発達心理学研究, **20**, 234-242.
- 松本隆志 (2009). 不良物語という名の搾取構造 関西学院大学社会学部紀要, **108**, 85-98.

- 宮野祥雄 (1981). 非行少年の自己概念—Q-テクニックによる分析— 教育心理学研究, **29**, 10-19.
- 永房典之(2004). 非行抑制機能としての恥意識に関する研究,社会安全, **52** , 17-34.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004) .一般他者を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究 **5**, 19-27.
- 野田陽子 (1999). 青少年の友人関係を通してみる非行といじめ 総務庁青少年対策本部第3回非行原因に関する総合的研究調査 214-224.
- 小保方晶子・無藤隆 (2005). 親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因 発達心理学研究, **16**, 286-299.
- 小保方晶子・無藤隆 (2006). 中学生の非行傾向行為の先行要因--1学期と2学期の縦断調査から 心理学研究,**77**,424-432.
- 岡邊健(2010). 項目反応理論を用いた自己申告非行尺度の作成 犯罪社会学研究, **35**,149-162.
- Oosterhof, N. N., & Todorov. (2008). The Functional Basis of Face Evaluation. *PNAS*, 105(32), 11087-11092.
- Patterson,G. R. (1993). Orderly change in a stable world: The antisocial trait as a chimera. *Journal of consulting and Clinical Psychology*, **61**,911-919.
- Perrett, D. I., Lee, K. J., Penton-Voak, I. S., Rowland,D. R., Yoshikawa, S., Burt, D. M., Henzi, S. P., Castles,D. L. & Akamatsu, S. (1998). Effects of Sexual Dimorphism on Facial Attractiveness. *Nature* 394, 884-887.
- 佐藤弥・魚野翔太・松浦直己(2008). 非行少年における表情認識の問題 電子情報通信学会技術研究報告, **108**, 1-6.
- 品田秀樹 (2008). 少年院における SST 前田ケイ・安西信雄(編) こころの科学 本人・家族のための SST 実践ガイド 日本評論社 pp60-67.
- 角谷慶子 (2008). 少年犯罪・非行の精神療法—SSTによるアプローチ— 精神療法,**34**, 290-297.
- Sutherland,E. D. , & Cressey, D. R. (1960). *Principle of Climnology (6th ed)* . Chicago,Lippincott.
- 田上直樹・苗村健・原島博(1999). PC環境におけるモデルベース顔画像処理ソフトウェアの機能拡張(1)・顔演算ツールを用いた平均顔の作成-. 電子情報通信学会 1999年総合大会. A-14-1, 302
- Taylor,T. K. , Eddy,J. M. , & Biglan,A. (1999). Interpersonal Skills Training to Reduce Aggressive and Delinquent Behavior: Limited Evidence and the Need for an Evidence-Based System of Care. *Clinical Child and Family Psychology Review*, **2**,169-182.
- Veneziano,C. , & Veneziano. L. (1988). Knowledge of Social Skills among Institutaionalized Juvenile Delinquents. An Assessment. *Criminal Justice and Behavior*, **15**,152-171.